

[教育実践研究報告]

「労働の場における看護」(産業看護) 実習を通しての学生の学び
- 学習の中心的課題と今後の方向性 -

| | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 梅 津 美 香 | 田 中 克 子 | 北 村 直 子 | 小 田 和 美 |
| 兼 松 恵 子 | 奥 村 美奈子 | 古 川 直 美 | 原 敦 子 |
| 林 幸 子 | 小 野 幸 子 | 坂 田 直 美 | 齋 藤 和 子 |

What Students Have Learned through Occupational Health Nursing Practice ? :
The Central Subjects and Directionality of Learning

Mika Umezu, Katsuko Tanaka, Naoko Kitamura, Kazumi Oda,
Keiko Kanematsu, Minako Okumura, Naomi Furukawa, Atsuko Hara,
Sachiko Hayashi, Sachiko Ono, Naomi Sakata, and Kazuko Saito

はじめに

本学の「労働の場における看護」(産業看護)の実習は、3年次の7週間にわたる成熟期看護学領域別実習の中に、一般病院、高齢者ケア施設における実習と並び位置づけられている。大学教育の中では、地域看護学実習の中に産業看護実習として位置づけられることが多い¹⁾のに対し、本学では、看護活動の場ではなく、対象に焦点を置いたカリキュラム編成の特徴が反映され、成熟期の働く人々という視点から成熟期看護学領域に組み込まれている。

看護学実習の目的のひとつは、看護活動の行われている場で、自ら看護過程を展開し具体的な看護方法を学ぶところにある。しかし、本実習は1グループ12~14名、1日間であり、学生が実習の中で看護実践を行なうことは非常に難しい。さらに実習施設である事業所には、1名ないし数名の看護職しかいないため、10数名の学生の実習の場合には、その看護職自身が実習対応に専念せざるを得ず、看護活動そのものを見学することも難しい。必然的に、実例を交えて「労働の場」における実践看護活動について話を聞く部分が多くなる。これは他大学でも同様であり、国内の看護系大学で1単位以上の産業看護実習を行っているところは、極めて少ないと考えられている²⁾。その理由は様々であろうが、本学と同様、実

習施設の確保が難しいということが第一に挙げられる。

従って、限られた条件の短期間の実習であるからこそ、成熟期看護学領域別実習の一環として学ぶ意味と学習の中心的な課題をはっきりさせ、不足している部分を補強し、より学びが深まる実習方法を模索して行くことが肝要である。

研究目的

学生の「労働の場における看護」実習記録より、実習を通じて学生が捉えた労働の場における安全と健康に関する具体的な活動を分析し、学習の中心的課題および今後の方向性を明らかにする。

「労働の場における看護」(産業看護) 実習

1. 成熟期看護学領域別実習の実習目標と実習の場

成熟期看護学領域別実習の目的は、さまざまな健康状態で生活を営んでいる成熟期の人々への看護実践を通じて、成熟期看護のあり方について理解を深めることである。表1に示すとおり、実習の場ではなく、成熟期の対象への看護に共通する具体的目標(表中の具体的目標1)と健康課題ごとの具体的目標(表中の具体的目標2-A~2-E)を設定している。実習場は、学習可能と想定される健康課題を考慮して、一般病院、高齢者ケア施設、労

表1 成熟期看護学実習の具体的目標と援助の視点 (抜粋)

| | |
|---|--|
| 1. 成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し, 看護の役割と特性を学ぶ | |
| 《援助の視点》 | 1) その人と家族の意向・意志を尊重した援助 2) その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助 3) その人と家族の安全性と安楽性を確保した援助 4) 保健・医療・福祉との有機的連携 |
| 2. 健康課題の異なる成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し, 看護の役割と特性を学ぶ | |
| 2-A. 成熟期の人とその家族が健康維持増進のために生活を確立する看護 | |
| 《援助の視点》 | 1) 健康維持増進に向けての動機付けへの援助 2) 健康管理のセルフケア能力の助長への援助 3) 健康維持増進に利用できる資源の提供への援助 4) 環境の調整への援助 |
| 2-B. 健康回復過程にある成熟期の人とその家族の看護 | |
| 2-C. 生活の再編成が必要な健康障害をもつ成熟期の人とその家族の看護 | |
| 2-D. 生活の再構築が必要な健康障害をもつ成熟期の人とその家族の看護 | |
| 2-E. 人生の終末を迎える (迎えている) 成熟期の人とその家族の看護 | |

* 2-B, 2-C, 2-D, 2-E の援助の視点については省略

働の場 (事業所) の3箇所を組み合わせている。一般病院は治療機関, 高齢者ケア施設は日常生活上の介護・看護が必要な高齢者の入所施設であることから, 看護の対象の成熟期の人々の健康課題は具体的目標の2-B~2-Eに該当すると想定している。「労働の場」では, そこで働く成熟期の人々を看護の対象としており, 健康課題は成熟期看護学実習の具体的目標2-A~2-Eまですべてが含まれると想定している。従って, 具体的目標の2-B~2-Eと異なり, 2-A. 成熟期の人とその家族が健康維持増進のために生活を確立する看護については, 一般病院や高齢者ケア施設では学ぶことが難しく, 「労働の場」で学習することが期待されている。

2. 「労働の場における看護」実習施設と実習内容

平成15年度には, 実習施設として3事業所に依頼した。いずれの事業所も製造業で, 保健師または看護師が常勤している。1グループ12~14名, 1日間の実習を, A事業所において3回, B事業所2回, C事業所1回実施した。

実習内容は事業所により若干異なるものの, 共通して事業所 (会社) 概要の紹介, 事業所内の見学, 健康と安全に関する活動の紹介, カンファレンスが組み込まれている。実習では, 3事業所とも安全衛生担当者の関わりがあったが, 関与の程度は事業所によって異なった。また, 事前学習として, 実習先の事業所の概要をインターネット等で調べることを課した。実習後には, 学内で2つのグループが合同でそれぞれの実習施設で学んだことを発表し, 90分かけて討議している。

対象と方法

1. 対象

本研究の対象は, 平成15年度に領域別実習を行った3年次学生の「労働の場における看護」実習記録の『この実習で学んだこと・感じたこと』の記述である。実習学生76名中同意の得られた全員の記述を分析対象とした。

2. 分析方法

1) 学生の『この実習で学んだこと・感じたこと』の記述を熟読し, 実習施設で行われている (あるいは必要だと考えられる) 安全と健康に関する具体的な活動 (以下, 具体的活動と略す) について, その目的・意図が明記されている記述を抽出した。見学あるいは活動紹介が主体の実習となるので, ただ行われていた活動の事実のみを知ったとしても十分に学べたとは言いがたい。そのため, 学生が目的・意図も含めて理解した具体的活動に焦点を絞った。また, 事業所として組織的に行なわれている安全と健康に関する活動の中に看護活動が位置づけられているという特徴があるため, 看護職が直接実施している活動以外の活動についても区別せずに抽出した。

2) 記述を, 目的・意図と具体的活動に沿って要約した。

3) 要約した文章を類似性に従いまとめて, サブカテゴリーとして命名し, さらにサブカテゴリーを比較検討し目的・意図の類似性にしたがってまとめカテゴリーとして命名した。

4) 3) で分類されたサブカテゴリーを, 成熟期看護学領域別実習要項の成熟期の対象への看護に共通する具

体的目標1. 成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶと具体的目標2-A. 成熟期の人とその家族が健康維持増進のために生活を確立する看護の《援助の視点》と照合した。その際、複数の援助の視点に該当する場合には、重複カウントした。

5) 2)～4)の分析については、成熟期看護学講座の教員4名で繰り返し討議し合意が得られたものを採択した。さらに、実習を担当したその他の5名の教員から意見を聴取し、検討を重ねた。

3. 倫理的配慮

実習記録を研究に用いることについて、全学生が領域別実習を終了した後、研究目的、個人のプライバシーを保証すること、承諾の諾否が成績に関与しないことについて文書および口頭で説明し、依頼書を配布して書面にて同意を得た。

結果

1. 学生が捉えた安全と健康に関する活動(表2)

目的・意図が記述された具体的活動について、53名の学生から112記述が得られた。その意味内容から要約をまとめ命名し、46のサブカテゴリー(本文中ではで表示)が得られた。命名にあたっては、具体的活動そのものをできるだけ反映することに留意した。さらにサブカテゴリーを比較検討し目的・意図の類似性に従って分類した結果、14のカテゴリー(本文中では【 】で表示)にまとめられた。14のカテゴリーは、【安全に働けるようにする活動】【健康かつ安全に働けるようにする活動】【労働による健康への悪影響を防止する活動】【事業所が従業員の健康管理のために行なう活動】【心の健康を保てるための活動】【自分自身で健康管理ができるようになるための活動】【緊急時に適切に対処するための活動】【働きやすさを保証する活動】【事業所が従業員の労働意欲を高めるために行う活動】【事業所内の安全と健康に関する活動の方向性を調整する活動】【健康問題があることにより仕事上の不利益が生じないようにするための活動】【全従業員に健康管理が行き届くようにする活動】【受診行動を促進する活動】【健康管理室の環境を整える活動】である。

2. 具体的目標の援助の視点

サブカテゴリーごとに具体的目標1および具体的目標2-Aの援助の視点に該当する場合には、を、該当はしていないが関係の深い場合にはを示した(表2)。

1) 具体的目標1の援助の視点

具体的目標1は成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶことである。表2に示すとおり、援助の視点2)～4)までは該当するサブカテゴリーが見出せたが、1)その人と家族の意向・意志を尊重した援助については、確認できなかった。

援助の視点2)その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助としては、会社は自己管理をサポートする役割を担うことを従業員に示す健康意識を高めるように働きかける活動を従業員に知らせるなどの6つのサブカテゴリーが該当した。

援助の視点3)その人と家族の安全性と安楽性を確保した援助については、危険回避できるように外国人労働者に対しては母国語で提示する事故防止のために事故・災害の原因を追究し指導する緊急時に対応できるようにカードの所持および訓練を実施する安心して働けるように産業医・産業看護職が常駐している

授乳室や男女別の休養室を診療所内に設けるなどの8つのサブカテゴリーが該当した。

援助の視点4)保健・医療・福祉との有機的連携は、疾病の悪化を防ぐために早期に対応し他機関へつなげるが該当した。保健・医療・福祉との連携ではないが、職場と連携し危険な労働態様・労働環境を改善する管理者と連携して多数の従業員に対し安全衛生について働きかける職場と連携して従業員の健康管理を行なう事業所内役割から生じる視点の違いを理解し方向性を調整するために関係者間で話し合う職場と連携して全従業員に健康管理が行き届くようにするという職場あるいは職場の管理者等との連携が具体的活動の中に示された。

2) 具体的目標2-Aの援助の視点

具体的目標2-A. 成熟期の人とその家族が健康維持増進のために生活を確立する看護の《援助の視点》は、1)～4)までのすべてについて、該当するサブカテゴリーが見出された。

援助の視点1)健康維持増進に向けての動機付けへの

表2 「労働の場」で行なわれている安全と健康に関する活動と該当する具体的目標の援助の視点

| カテゴリー | サブカテゴリー | 具体的目標 1 援助の視点* | | | | 具体的目標 2-A 援助の視点* | | | |
|------------------------------------|--|-------------------|----|----|----|---------------------|----|----|----|
| | | 1) | 2) | 3) | 4) | 1) | 2) | 3) | 4) |
| 安全に働けるようにする活動 | 安全についての掲示・呼びかけをする | | | | | | | | |
| | 安全の基礎知識を提供する | | | | | | | | |
| | 危険回避できるように外国人労働者に対しては母国語で提示する | | | | | | | | |
| | 事故防止のために事故・災害の原因を追究し指導する | | | | | | | | |
| | 保護具着用について従業員別に掲示する | | | | | | | | |
| | 職場と連携し危険な労働環境・労働態様を改善する | | | | | | | | |
| 健康かつ安全に働けるようにする活動 | 労働環境・労働態様を把握した上で危険を予測し対策をとる | | | | | | | | |
| | 安全衛生に関する個人的・組織的取り組みを推進する | | | | | | | | |
| | 安全衛生の意識向上のために全員が役割を担う | | | | | | | | |
| | 安全衛生の意識向上のために表彰制度がある | | | | | | | | |
| | 管理者と連携して多数の従業員に対し安全衛生について働きかける | | | | | | | | |
| 労働による健康への悪影響を防止する活動 | 安全衛生に関する教育を行う | | | | | | | | |
| | 有害物の使用による健康障害の防止のために安全衛生委員会を設置する | | | | | | | | |
| | 健康への長期的影響を考慮し継続して管理する | | | | | | | | |
| | 健康影響を知った上で労働環境・労働態様を改善し予防する | | | | | | | | |
| | 職業性疾患の早期発見のために健康診断を定期的に行なう | | | | | | | | |
| | 保護具の着用率が低い原因を追究する | | | | | | | | |
| | 労働環境・個人の特徴を把握する | | | | | | | | |
| 事業所が従業員の健康管理のために行う活動 | 保護具着用促進のために労働者個々の特徴を考慮する | | | | | | | | |
| | 健康状態を把握するために健康診断を定期的に行なう | | | | | | | | |
| | 職場以外の休憩所・食堂なども視野に入れ労働環境を整える | | | | | | | | |
| | 職場と連携して従業員の健康管理を行なう | | | | | | | | |
| | 疾病の悪化を防ぐために早期に対応し他機関へつなげる | | | | | | | | |
| 心の健康を保てるための活動 | 個別性に合わせた看護を行なうために入社時から継続して管理する | | | | | | | | |
| | ストレスを軽減するために面談や巡視を活用する | | | | | | | | |
| | メンタルヘルス上対応が必要な人を把握し働きかける | | | | | | | | |
| | メンタルヘルス上の問題に対応できる体制を作る | | | | | | | | |
| | メンタルヘルスの教育・啓蒙活動を行なう | | | | | | | | |
| 自分自身で健康管理ができるようになるための活動 | メンタルヘルスにより影響を与えるために事務所のレイアウトを考慮する | | | | | | | | |
| | 会社は自己管理をサポートする役割を担うことを従業員に示す | | | | | | | | |
| | 健康意識を高めるように働きかける活動を従業員に知らせる | | | | | | | | |
| | 健康管理の方法についての知識を与え予防的な指導を行なう | | | | | | | | |
| | 健康についての資料を準備する | | | | | | | | |
| 緊急時に適切に対処するための活動 | 食堂の食事に栄養成分表示をする | | | | | | | | |
| | 健康意識の向上のために作業内容に応じた健康診断を行う | | | | | | | | |
| 働きやすさを保証する活動 | 緊急時に対応できるようにカードの所持および訓練を実施する | | | | | | | | |
| | 夜間の緊急事態にも対応できる診療所の体制を整える | | | | | | | | |
| 事業所が従業員の労働意欲を高めるために行う活動 | 安心して働けるように産業医・産業看護職が常駐している | | | | | | | | |
| | 授乳室や男女別の休養室を診療所内に設ける | | | | | | | | |
| 事業所内の安全と健康に関する活動の方向性を調整する活動 | 労働意欲増進につながるように技能検定を行なう | | | | | | | | |
| | よりよく仕事上の交流ができるために事務所のレイアウトを考慮する | | | | | | | | |
| 健康問題があることにより仕事上の不利益が生じないようにするための活動 | 事業所内役割から生じる視点の違いを理解し方向性を調整するために関係者間で話し合う | | | | | | | | |
| | 健康問題をもつ従業員のプライバシーに配慮し対応する | | | | | | | | |
| 全従業員に健康管理が行き届くようにする活動 | 職場と連携して全従業員に健康管理が行き届くようにする | | | | | | | | |
| | 受診行動を促進する活動 | | | | | | | | |
| 健康管理室の環境を整える活動 | 事業所内で診療・検査が受けられるようにする | | | | | | | | |
| | 健康管理室内に静かな環境をつくる | | | | | | | | |

*具体的目標 1 および具体的目標 2-A の援助の視点に該当する場合には を、該当はしていないが関係の深い場合には を示した。

援助については、安全衛生の意識向上のために表彰制度があるメンタルヘルスの教育・啓蒙活動を行なう労働意欲増進につながるように技能検定を行なうなど12のサブカテゴリーが該当した。

援助の視点2)健康管理のセルフケア能力の助長への援助は、安全の基礎知識を提供する安全衛生に関する教育を行うストレスを軽減するために面談や巡視を活用する健康管理の方法についての知識を与え予防的な指導を行なうなど9つのサブカテゴリーが該当した。

援助の視点3)健康維持増進に利用できる資源の提供への援助については、職業性疾病の早期発見のために健康診断を定期的に行なう健康についての資料を準備する職場と連携して全従業員に健康管理が行き届くようにする事業所内で診療・検査が受けられるようにするなど6つのサブカテゴリーが該当した。

援助の視点4)環境の調整への援助については、有害物の使用による健康障害の防止のために安全衛生委員会を設置する職場以外の休憩所・食堂なども視野に入れ労働環境を整えるメンタルヘルスによい影響を与えるために事務所のレイアウトを考慮する健康管理室内に静かな環境をつくるなど8つのサブカテゴリーが該当した。

・考察

1. 学生が捉えた安全と健康に関する活動からみた「労働の場における看護」活動の特徴

学生が捉えた安全と健康に関する活動には、「労働の場における看護」活動の特徴が反映されている。その特徴についての学生の学びをカテゴリーから考察する。

第1に、安全あるいは安全かつ健康に働けるようにという活動目的が示されている。緊急時に適切に対処するという活動もこれらに関連している。今回の実習施設がいずれも製造業であり、製造工程で生じる多くの危険に対して、最大限の配慮をしていることの現れと考えられる。同時に安全や健康の確保だけではなく働きやすさについての学びも認められた。

第2に、労働による健康への悪影響を防止する、健康問題があることにより仕事上の不利益が生じないようにするという、労働が健康に及ぼす悪影響と健康が労働に

及ぼす悪影響を防止する両面の活動がとらえられていた。この両側面の理解は「労働の場」のみではなく、成熟期の働く人々を対象とする看護活動の中で非常に重要な基本的事項であるが、「労働の場」における実習だからこそ、より明確に学べた可能性がある。

第3に、従業員の健康管理、労働意欲を高める、全従業員に健康管理が行き届くようにすることを目的とした、事業所という組織全体で取り組む活動が捉えられていた。そのために事業所内の安全と健康に関する活動の方向性を調整することも学んでいた。事業所として組織的に行なわれている安全と健康に関する活動の中に看護活動が位置づけられているという特徴をもっとも反映した学びであろう。

第4に、自分自身で健康管理ができるようになること、受診行動がとれることを意図しているのは、比較的健康度の高い働く人々を対象とした活動の特徴が反映されているのであろう。心の健康についての活動は、不況等による事業の方向性の転換により従業員が受ける精神的負荷を考慮すると、事業所として重要視せざるを得ないことの反映であろうか。

以上より、学生は成熟期の人々にとって重要な課題である「労働」に関連して「労働の場における看護」活動の特徴を学んでいた。

2. 《援助の視点》からみた「労働の場における看護」

実習の目標達成状況

1) 具体的目標1の援助の視点

具体的目標1については、1)意向・意志を尊重した援助を除き、その他の3項目については、学べたことが確認できた。意向・意志を尊重した援助が確認されなかったことについては、実習の中で看護活動そのものの見学が難しいことが少なからず影響しているであろう。昨年、小田ら⁴⁾が報告した外来実習の分析でも、記述された看護が少なかったという同様の傾向があり、患者への付き添いを主とした実習であるため、看護師が患者と関わる場面を見学する機会が時間的に少なかった影響ではないかと考察されている。成熟期の働く人への援助の中で、「労働の場」においても意向・意志は当然尊重されている、むしろ、自らの意志により働いている人を対象にしていることから、より大事にされていると思われる。しかし、この援助の視点は、実際の看護場面に遭遇する

ことで、理解が促進される性質をもつものであり、特に実習の中で強調されない限り、学生がそのことを意識する機会は少ないのかもしれない。また、カンファレンス等で補おうとしても、グループ人数が10人以上と多いため、限られた時間の中で全学生が主体的に討論に参加することは難しい。

援助の視点2)のその人と家族の自立性と自律性を尊重した援助に関しては、従業員の健康管理について事業所が直接的に関与する部分がある一方で、本来、健康管理は自ら行うものであるという基本的考えのもとに行う働きかけが示された。会社が従業員の健康管理に果たす役割を自立性・自律性という面から示すという点を捉えていた。

援助の視点3)のその人と家族の安全性と安楽性を確保した援助としては、主としてアクシデントの予防・対処といった安全性の確保に重きが置かれていたが、授乳室の設置など働きやすさの保証といった形で安楽性の確保も捉えていた。

援助の視点4)の保健・医療・福祉との有機的連携は、疾病が悪化した場合には他機関へつなげる、として確認できたが、その他に、保健・医療・福祉ではない職場あるいは職場の管理者との連携が多く捉えられていた。成熟期の働く人々が労働生活を営む上で、職場の管理者を含めた構成員は重要な関わりを持つ。従って、職場(管理者)との連携が様々な活動の中で重要視されていることがここに示されている。看護実践において、連携する先を保健・医療・福祉のみに限定する必要はない。本人と家族に関わる部門として職場も含めることについて、今後、要項を再検討する過程で、討議していくべきであろう。

2) 具体的目標2-Aの援助の視点

援助の視点1)の健康維持増進に向けての動機付けへの援助には、表彰制度、教育・啓蒙活動、技能検定といった方法による援助が見出された。

援助の視点2)の健康管理のセルフケア能力の助長への援助として、知識の提供、予防的指導、面談や巡視などの方法による援助が見出された。

援助の視点3)の健康維持増進に利用できる資源の提供への援助については、全従業員に健康管理が行き届くようにするためのシステムや、事業所内で医療が受けら

れる体制を整えるといった活動から、メンタルヘルスを考慮した事務所のレイアウト、健康に配慮した食事の提供、健康診断の実施という法的制度に則った事業という資源が捉えられていた。

援助の視点4)の環境の調整への援助については、安全衛生委員会が設置されているという環境、従業員が労働の場で共通利用する職場以外の休憩所、食堂などの環境、事務所、健康管理室など、有形無形の環境の調整が捉えられていた。

以上より、本実習では、健康維持増進のために生活を確立することを必要とする成熟期の人への動機付けやセルフケア能力の助長のための援助方法を学び、健康維持増進に利用できる資源の提供が広がりとお興行のある活動であること、調整の対象となる様々な環境について理解していることが確認できた。さらに《援助の視点》の1)~4)までのすべてが捉えられていたことから、1日の実習であっても、成熟期領域の他の実習施設で関わりにくい健康課題を持つ対象への看護を学ぶことができるということを示唆しているものと考えられる。

3. 「労働の場における看護」実習の今後の方向性

今回の分析結果より、学生は「労働の場における看護」活動の特徴を学んでいたことが確認できた。

さらに援助の視点との照合から、「労働の場における看護」実習の学習の中心的課題は、具体的目標1にある4つの援助の視点をすべて学ぶこと、具体的目標2-A健康維持増進が必要な成熟期の人とその家族への看護の援助の視点を学ぶことであると考えられた。は、成熟期の人を対象にした看護の共通の目標であり、実習の場がどこであっても、すべての援助の視点を学ぶ必要がある。については、主として健康維持増進が必要な成熟期の青壮年期の人を対象とした看護を学ぶことが可能であると確認されたが、成熟期の他の実習施設では学びにくい健康課題であるので、より深く学習できるように強化することが重要である。

上述した学習課題をより効果的に達成するために、今後の実習方法について、実現可能な改善の方向を示す。

実習の中で、具体的看護場面を見学できる機会をつくる。あるいは、具体的な題材をもとに必要な看護を考え討議する場を設定する。この実現のために、1グループの学生数を減らし10人未満とする。各々の「労働の

場」で行われていた看護活動についての学びを具体的目標1, 具体的目標2-Aの援助の視点にフィードバックしながら学内で統合する機会を設定する。

なお、今回は目的・意図の記述された具体的活動のみを分析しているため、結果的に全学生ではなく53名の学生の記述のみが対象となったという限界がある。引き続き目標到達を確認して行くためには、目的・意図を含めて具体的活動を考察できるように課題提示の方法の改善が必要である。

まとめ

「労働の場における看護」(産業看護)実習で、学生は「労働の場における看護」活動の特徴を捉え、成熟期看護学領域別実習の具体的目標1および具体的目標2-Aの援助の視点を学ぶことが可能であることが確認できた。しかし、引き続き目標到達を確認して行くためには、目的・意図を含めて具体的活動を考察できるように課題提示の方法の改善が必要である。

学習の中心的な課題は、具体的目標1にある4つの援助の視点をすべて学ぶこと、具体的目標2-A健康維持増進が必要な成熟期の人とその家族への看護の援助の視点を学ぶことであることが明らかとなった。

実習方法の改善については3点挙げられた。具体的看護場面を見学できる機会をつくる。あるいは、具体的な題材をもとに必要な看護を考え討議する場を設定する。

1グループの学生数を減らし10人未満とする、各々の「労働の場」で行われていた看護活動についての学びを具体的目標1, 具体的目標2-Aの援助の視点にフィードバックしながら学内で統合する機会を設定する。

おわりに

岐阜県下には常勤の保健師および看護師のいる事業所が非常に少ない⁴⁾上に、事業所の多くは、部外者の立ち入りを嫌うという性質を有し、実習依頼には多くの困難が伴っている。しかし、実習による学びを確認して行く中で、少しでも効果的な学習が可能となるように実習施設の看護職の方々とともに前進していきたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、記録を使用することにつ

いて快く承諾してくれた3年次学生の方々に感謝します。さらに、1日間という短い時間の実習において、学習効果が最大限に引き出されるように関わってくださった実習施設の方々に感謝いたします。

引用文献

- 1) 荒木田美香子, 青柳美樹:「21世紀の産業看護活動」-産業看護基礎教育の立場から-,第75回日本産業衛生学会「産業看護フォーラム」;1-6,2002.
- 2) 前掲 1).
- 3) 小田和美, 田中克子, 北村直子ほか:成熟期看護学実習の外来実習において学生がとらえた「看護」-目標達成像からみた実習方法の課題と方向性-,岐阜県立看護大学紀要3(1);95-101,2003.
- 4) 上野美智子, 梅津美香, 奥井幸子ほか:岐阜県下産業看護の現状,岐阜県立看護大学紀要3(1);15-21,2003.

(受稿日 平成16年2月6日)